

戦争の記憶／記憶の戦争——奥泉光「石の来歴」論 前編（構造主義的分析）

菅 本 康 之

1

米ソ冷戦崩壊と、湾岸戦争の衝撃、そしてそれに続くバルカン半島におけるおぞましい内戦の最中、奥泉光の「石の来歴」（一九九三年十二月）は、発表された。レイテ島からの元復員兵真名瀬剛の戦後を描いたこのテキストは、ある意味では「戦後文学」に対する批評的小説といえるかもしれない。というのも、戦場であるフィリピンのレイテ島は、大岡昇平の『野火』や『レイテ戦記』を容易に連想させるし、戦争の直接体験がない世代の「作者」とって、その想像力には、戦後文学の「戦争の記憶」がある種の既視感として、あるいは痕跡としてこのテキストに点綴されているからである。「作者」に戦争の直接体験がないということ、それ自体がこのテキストの決定的な瑕疵とはならないが、同時にこのテキストは戦争を知らない「作者」にとつての「戦争の記憶」／「記憶の戦争」とは何か、その可能性と限界を示唆しているともいえる。

たとえば、それは、第一に直接的な「戦争の記憶」ではなく、「記憶の戦争」である点にある。ここでいう「記憶の戦争」とは、「戦争

争の記憶」、言い換えれば、戦争／戦場の直接体験の「記憶」ではなく、「記憶」のなかの「戦争」、すなわち戦争を知らない世代の「作者」にも批評的に介入することができる戦争をめぐる主人公の「記憶の戦争」の葛藤・闘争を意味する。それは、言い換えれば主人公の戦争とトラウマの問題ともいえる。

そして、第二に、テキストの「物語」内において「現実」と「虚構」が結びつくことである。言い換えれば、テキストの「現在」と「戦場」とを想像力によって架橋することだ。とくに第二の方法は、「浪漫的な行軍の記録」へと踏襲されている。これら、二つの方法は、相互に関係しうるから、「読み手」の解釈によって結末の受け止め方が随分と異なったものになりうる。たしかに、「文学批評」は、「作者」の「意図」を無視しうることを主張したが、ロラン・バルトの『テキストの快楽』を例外として、いかなる解釈も可能であるということとは退けた²。

それでは、ここで、「石の来歴」に対してどのようにアプローチしていけばいいのだろうか。たとえば、文庫版『石の来歴 浪漫的な行軍の記録』³に所収の「作者」による「来歴の来歴」⁴を主要な参照点にしてしまうと「作者の意図」こそが、わたしたちの

古色蒼然とした解釈枠になりかねない。だが、テクストが「記憶の戦争」、すなわち「意識」と「無意識」の葛藤を描いているのだとすれば、むしろ「作者」の「意図」、すなわち「意識」とその「無意識」との関係にも注意しなければならないだろう。テクストが、「無意識」をとりあつかうのであれば、当然「作者」の、あるいはテクストの「政治的無意識」の問題は避けて通るわけにはいかない。

2

まず、テクストの主人公の「無意識」を、「記憶」―「意識」と「無意識」―「抑圧されたものの回帰」ということで分析することになれば、フロイトの理論が召喚されるべきであろうが、肝心の「意識」と「無意識」の分析が恣意的なものにならないようにするためには、テクストの「科学的な」分析である「構造主義的分析」あるいは「物語論」を経由すべきだろう。

「物語の構造分析」あるいは「物語論」は、パリの亡命者たちによって、先鞭がつけられ、極限まで洗練されてきた。ツベタン・トドロフ、A・J・グレマスは、東欧から亡命者だった。彼らには、西欧であまり知られていなかったロシア・フォルマリズムを持ち込んだ多大な功績があるが、「物語論」といえば、やはりその極北はジュラル・ジュネットの『物語のディスコース』⁵というこ

とになる。そのテクストは、Ⅰ 順序、Ⅱ 持続、Ⅲ 頻度、Ⅳ 除法、Ⅴ 態によって構成され、「物語」を理論的・体系的にとらえることに多大な影響を及ぼしてきた。ここでもまず、ジュネットの「物語論」に依拠しながら「石の来歴」をふるいにかけて上で、さらに「物語の構造分析」のより極北というべき、ロシア・フォルマリズムであったウラジミール・プロップの理論をより洗練したA・J・グレマスの有名な「行為項モデル (actantial model)」によって読解・分析することが、「現実」と「虚構」を架橋したこのテクストを、よりよい意味で単純化するのに役に立つだろう。

ジュネットの「物語論」にしたがえば、「石の来歴」の「物語内容の時間」は、一九四五年夏から一九七二年夏にむかっており、およそ一七年の「射程」、すなわち、日本の敗戦前夜から高度経済成長期の終わりにむけ、漸進的に経過していくといえるが、「物語言説の時間」においては、主人公真名瀬剛は、「錯時法」や「反復的単起法」によってしばしば、一九四五年の夏の「記憶」に引き戻されるのである。

「語り」は、「三人称」であるが、その「視点」は、ほぼ真名瀬剛に同一化することによって展開されるテクストである。「芥川賞」の「選評」において大江健三郎が「講談調」と評言したように、たしかにこのテクストの「語り」は、ディエゲシス (diegesis) 的であり、詳細なリアリズムというよりは、ヘンリー・ミラーが

いう「語りのことば」でまとめてしまう telling なのである。

実際に、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで構成されている「石の来歴」は、「Ⅰ」において分節化された「会話」は全く存在せず（「上等兵」、「大尉」の発話は「地」の文に埋め込まれており）、「Ⅱ」では、離婚することになる妻から一方的に真名瀬を罵倒する「セリフ」と大尉の「殺せー」という「悪夢」のなかでの大声音などがあるのみで、真名瀬のセリフは分節化されることなく、「語り」のなかに埋没している。「悪夢」を経過した「Ⅲ」においてはじめて真名瀬は「発話」をするのであるが、戦後、真名瀬が懸命に取り組んできた石の蒐集と研究を全否定する、大学生になった次男貴晶との「会話」によってやりこめられるのである。

ジュネットの「物語論」にしたがえば、おおよそのようにテクストを分析・整理できるだろう。

3

そのうえで、さらに「物語の構造分析」と接合すると「石の来歴」は、さらに賦活化するだろう。

「物語の構造分析」は、構造主義による「物語」へのアプローチであるが、その最も有名なものが罗兰・バルトによる「物語の構造分析序説」である。これは、雑誌『コミュニケーション』の特集「記号学の研究 物語の構造分析」に収められた多数の「構

造分析」の論文のために「序説」とされているが、バルトの「構造主義」とその限界をあからさまに示していて、きわめて興味深い論文である。皮肉にもこの「物語の構造分析序説」が所収されたテクストのなかには、あの有名な「作者の死」、「作品からテクストへ」も収められており、構造主義者バルトとポスト構造主義者バルトが共存しているのである。しかし、それは先駆的な試みではあったが、ジュネットの「物語論」に比較すると体系化や洗練性という点で、見劣りがするのは否めない。ならば、プロップを継承しながらそれを極限まで単純化した、ジュネットに劣らない「構造主義的物語論」を構築したA・J・グレマスの『構造意味論』で提起される「行為項モデル」ではどうであろうか。「行為項モデル」とは、行為項間に成り立つ構造であり、物語は、一つの意味構造として理解できるため、物語は表意作用の構造体と見なされる。このモデルによれば、「主体—対象」、「送り手—受け手」、「援助者—敵対者」の三組の二項対立の組み合わせによって「物語の構造分析」を行うことが可能となる。いうまでもなく、『構造意味論』は、きわめて難解で「乾いた」テクストだが、この組み合わせによる分析は、たとえばあの有名なギリシャ悲劇『オイディプス王』を例にしてみると、三組の二項対立のあまりに簡素に思える「行為項モデル」もおおよそ次のような複雑で振れたものになる。

ラマー・セルデンが啓発的に「行為項モデル」を『オイディプ

ス王』において敷衍し、あきらかにしているように、ここでは「主体／対象」欲求、探究」は、通常の物語のような単純な二項対立ではない。あるいは、「主体」がある「目的」や「欲望」をもって「対象」を追いかけるだけでもない。それは、「主体」であるオイディプスと「探求される対象」が別々の存在ではなく、オイディプス自身が「主体」でありながら「対象」であるという、抗いのような悲劇的なアイロニーによって、自分で自分自身を「探求」することになる。また「送り手／受け手」においても、アポロンの神託はオイディプスの罪を預言するが、テイレシオス、イオカステ、使い、羊飼いのすべてが知ってか知らずか、それが真実であることを確証するが、ということは、この悲劇はオイディプスが「メッセージ」を誤解することに関するものであるといえる。「援助者あるいは妨害（援助者／敵対者）」では、テイレシオスとイオカステはオイディプスが犯人を発見するのを「妨害」しようとするが、それに対して使いと羊飼いが知らずにオイディプスの「探索の援助」をする。ところが、オイディプス自身が「メッセージ」の正しい解釈を「妨害」するので。

グレマスの読解では、自ら実父を殺し、インセスト・タブーを犯す凄惨な悲劇『オイディプス王』は、このように分析されうるのだが、ならば、「石の来歴」は、どのような「物語の構造」になっているであろうか。

レイテ島からの敗残兵として故郷の秩父に戻った真名瀬剛は、亡き父が残した古書を元手に街に小さな書店を営むことを生業としながら、レイテ島で聞いたある話の断片から、石の蒐集・標本づくりに没頭することになる。「石」の蒐集・標本づくりは、戦場のレイテ島での「送り手」である瀬死の「上等兵」による「石の来歴」の話に「受け手」の真名瀬が触発されたものである。しかし、別の「送り手」である、ある決定的な「記憶」、すなわち、真名瀬自身のトラウマの抑圧、「記憶」の欠落により戦後の真名瀬の石の蒐集は成立しているのだ。言い換えれば、「主体」である真名瀬の「意識」は、「対象」である彼自身の「無意識」の探求を怠ることで、戦後の真名瀬の石の蒐集・標本作りは真名瀬自身に大きな喜びと幸福をもたらすのである。（Ⅰ）

「Ⅱ」においては、真名瀬は依然として「送り手」であるトラウマ、欠落した「記憶」に気づくことなく、あるいは「対象」を「探求」することがない。真名瀬は、レイテ島で敗残兵となった「記憶」を「無意識」に抑圧しているのであるが、その真名瀬は、「石」の蒐集と標本づくりに大人びた興味を示して、その父を慕う最愛の長男裕晶を、洞穴のなかで何者かに凄殺されることで喪うという悲劇にみまわれる。裕晶が「送り手」だとすると、真名瀬は、息子の「メッセージ」を誤読したことになる。あるいは、自らが、「石

の来歴」の話をした「上等兵」の「メッセージ」とそれにまつわる決定的な「記憶」を想起することを自ら「妨害」したともいえる。裕晶の死をきっかけにアルコル中毒になり、真名瀬に「人殺し、人殺しと喚く」狂気の淵に落ちた妻と離婚することになる真名瀬だが、きわめて特異な「語り」は、ここで初めて「会話文」を分節化する。孤独になった真名瀬は、次第にレイテ島での「悪夢」、すなわち「抑圧されたものの回帰」によってうなされるようになる。「送り手」たる「無意識」、抑圧された「記憶」がメッセージを送るようになるのだ。しかし、真名瀬はまだ、それを探求しようとはしない。(Ⅱ。)

裕晶とは対照的に、真名瀬に懐かなかった次男貴晶は、父とは離れて生活する。彼は、暴力をまとい、父と決して和解することなく、最期は、全共闘末期の武装闘争に参加し警官に射殺されることになるのだが、その貴晶は、自らの死の前に銃砲店で人を殺し、真名瀬の土蔵に訪れ、父を石の蒐集・研究を全面的に否定するばかりではなく、驚くべき事実、「メッセージ」を残していく。その点で、貴晶は最後の「送り手」といえよう。彼が、放ったのは、裕晶が惨殺された日、貴晶は、裕晶といっしょにおり、裕晶は真名瀬と見つけた洞穴に入り、父親の声がするといつて「洞穴」の奥に入ってしまったというのだ。テクストのなかの「現実」として、夜行列車の車中の人となっていた真名瀬は、その場に居られるはずはないのだが、その「洞穴」は、どうやら「過去」のフィリビ

ンの「洞穴」につながっているらしかった。その驚愕すべき「メッセージ」を受け取った真名瀬は、貴晶の死後、いよいよ「対象」の「探求」に向かつていかなければならない。真名瀬は、レイテ島での「送り手」である「戦場の記憶」を「抑圧」したことで、妻を絶望の淵に落とし、二人の息子を失う、悲劇を罪業として招いてしまったのである。(Ⅲ。)

つまり、ラマー・セルデンのグレマスの読解による「オイディプス王」の例と同様、「主体」と「対象」は真名瀬という同一人物であり、より正確に言えば真名瀬の「意識」が主体となり、「無意識」が対象となる。また、主たる「送り手」は「無意識」であり、「受け手」は、真名瀬の「意識」ということになる。真名瀬は、「無意識」を抑圧することで、ささやかな幸せを享受していたのだから、真名瀬による「無意識」の直視ないし、「探求」は、困難をきわめるものになるのである。

5

美しいことばが、やがて凄惨な物語を紡ぎ出すことがあるが、「石の来歴」においては、それは「三人称」により叙述される。しかし、その「語り」は、ほとんど主人公真名瀬と同一化しており、真名瀬の心情はいうまでもなく、登場人物の発話さえもほとんど分節化されず、地の文に制御されている。

「河原の石ひとつにも宇宙の全過程が刻印されている」とひとりの「男」が真名瀬剛に話しかける。

限度を超えた栄養不良とアメーバ赤痢による消耗の果て、針金細工に渋紙を貼りつけた趣の顔面にあつて、そればかりが敏捷に動く眼で真名瀬を眺めた男は、すっかり肉が剥げ落ち痩せ牛蒡みだいになった指に傍の石を摘んでみせると、これは種別するなら緑色チャートという石であると講釈を述べ、いまわれわれがいる洞穴は古生代に堆積した岩床が隆起した海食を受け生じたもので、その後さらに新生代第四紀に海面が後退して森林の洞穴になったのである、したがって周囲の壁には海棲生物の化石がたくさん含まれているはずであり、このかからにしても、仔細に顕微鏡観察するならば、放散虫等の生物化石が必ず見つかるのだと断言したあと、およそ次のような事柄を語った。（「石の来歴」、傍線部引用者）

このように、このテクス全体を貫く「男」のきわめて重要な発話はカギ括弧で括られず、テクスト全体に占める「会話」はきわめて少なく、それもカギ括弧ではなく、大江健三郎の小説のように——によって示されおり、三人称の「語り」に個人の発話らしきものが埋め込まれる文体となっているが、読者は、それを分節化しながら読まなければならない。この「語り」の文体が成功し

ているか否かは議論が分かれるところだが、少なくとも『野火』のような、「自意識的語り手」による明晰な「内面」描写は不可能となるが、その一方で「語り」は、やや説明的で、制御されているので、過剰な「内面」の迷宮に迷うことなく進むことができる。ちなみにここで傍線を引いた「緑色のチャート」は、このテクストの重要な伏線であると同時にテクスト全体を貫く「機能」を持っている。

先の引用のあとにも「男」の「講釈」は続く。

君は普段路傍の石に気をとめることなどないだろう。庭石や石材ならばまた話は別だろうが、およそ石や岩石は詰まらない、ただの意味もなく山河野原に散らばっているもので、邪魔にこそなれわざわざ手にとつて眺めてみる価値などないと考えているのだろう。だが、それは違う。変哲もない石ころひとつにも地球という天体の歴史が克明に記されているのである。（中略）つまり君が散歩の徒然に何気なく手をとる一個の石は、およそ五十億年前、後に太陽系と呼ばれるようになった場所で、虚空に浮遊するガスが凝固してこの惑星が生まれたときからはじまったドラマの一断面であり、物質の運動を刹那の形態に閉じ込めた、いわば宇宙の歴史の凝固物なのだ。（「石の来歴」¹²）

のちに真名瀬の運命を決定づける「送り手」であるこの「男」の「メッセージ」を、真名瀬は、その場において真摯に受け止めたわけではない。彼がこの「送り手」の「メッセージ」を「印象深く」思い起こすことになるのは、敗戦後、捕虜収容所で一年半を送り、復員したあと、実家の疎開先に落ちついてからである。真名瀬が、「送り手」の「メッセージ」をその場で聞いていた時、彼はその「メッセージ」にこころ動かされたわけではなく、「悪臭充満する穴蔵で聞いたときには内容とは全然別の事柄に気を奪われていた」（傍線部、引用者）からであり、奇妙にもおおよそ二年近く「送り手」たる「男」の「メッセージ」を「忘却」していたことになるのである。

別の事柄とは、「送り手」たる「男」、すなわち「息をして話をする人の目玉にたかる蛆」であり、そして「なによりも驚いたのは「君」の呼称」であった。

いうまでもなく、日本の「軍隊」において相手を「階級」で呼ぶことはあっても、「二人称」の、しかも「階級」が上の者が、「君」なる呼称を親しみを込めて、あえて「階級」の下の者に用いることは「戦場」ではありえぬことなのである。したがって、真名瀬の狼狽の一端は、男の「講釈」が軍隊組織の根幹の一端を揺るがすものだったからであり、それは同時に日本の戦後文学の「軍隊小説」に対するある種の批評的コミットメントでもありうるだろう。

戦場の眠りは必ず気絶に似た仕方では訪れたから、軀を横にしてなお人の話を聴いたはずがないにもかかわらず、言葉が頭に残ったのは不思議といえど不思議であつたけれど、（中略）あるいは飛行機の唸り声や砲撃の炸裂音が絶えず響きわたる戦地で聞くには、あまりに場違いな言葉が強い印象を刻み込んだのだとも考えられ、いずれにせよ、遠く月日を隔てるにつれ戦時の記憶が加速度をつけて薄れゆく一方で、洞穴の上等兵の語った言葉ばかりが鮮やかに甦るのは間違いない、やがて自ら好んで石をいじるようになれば、言葉は明瞭な形をなして確固たる場所に根をおろすようになった。（「石の来歴」）

捕虜収容所から帰還した真名瀬は、亡くなった父が残した書籍類をリヤカーに積んで行商を始め、秩父の市街地に店を出すようにもなり、生活が安定した頃、彼は「石」を集めはじめるのだが、「上等兵」のことばのみが「記憶」にあり、その「上等兵」がいかなる人で、どうなってしまったかなどは、思い起こすことなどなく、「記憶装置の奇妙な働き」に身をまかせることになる。こうして、主体たる真名瀬の「意識」は、「石」の蒐集に執心することにかえて、「上等兵」の存在を、あるいは「客体」たる彼の「無意識」を探索するのではなく、抑圧することになるのだ。

もちろん、真名瀬は、「戦争の記憶」のすべてを忘却している

わけではない。たとえば、マラリアの後遺症が出て悪寒に襲われている時など、「なにより悪夢となって甦るのは孤絶の恐怖」であつたりした。しかし、大岡昇平の『野火』における明晰で曇りのない孤絶の自己意識の描写の長さに比べれば、その叙述は、ごくわずかにすぎず、むしろ真名瀬は「十名ほどの隊を率いていた」「大尉」に魅了され、「命令に服従してさえいれば、あとは半ば夢幻に彷徨っていればよい兵士の安寧を得て一息ついた。」しかし、その「大尉」が、動けぬ兵隊を「鞘から抜いた軍刀でもって一人の頸を切つて廻り、死体を運び出した兵隊たちは、穴を掘つて埋める体力を惜しんで、許せよ、許せよ、と口々に呪文を唱えながら骸を林に投げ捨て」るひどくあさましい真似をしたことを思い返すのも戦後だいたい時間を経てのことで、さらには「病兵がみなうつとり微笑を浮かべて死んでいったとは、そんなはずはあるまいと思ひながら、どうしても否定できぬ真名瀬の記憶像である」¹⁵といった始末である。

真名瀬の「記憶」は、自らを正当化するかのようなもので、「夜みた夢を朝の寢床で想うに似た仕方でしか回想できなかった」のだが、そうした「記憶」のあり方について真名瀬自身は、「これはつまり思い出したくないということなのだろう」と自らを合理化するのである。いうまでもなく、真名瀬自身が自覚するように「戦争の記憶」は、「無意識」のなかに抑圧されることになる。

その一方で、真名瀬の「石」の標本蒐集は、岩石薄片の作成へ

と昂じていき、「道楽は病膏肓に入る域にまで達して」、「地質学の面白さにますます眼を瞠かれるにつれ」都合よく石の魅力を教えてくれたあの「上等兵」を思いだすありさまである。

だが、奇妙なのは、真名瀬は、「大尉」とは対照的に「石の来歴」を饒舌に語る「上等兵」の顔を思い起こすことができない。「当初割に元気だった上等兵は、真名瀬と組んで食料調達に走り回った」にもかかわらず。問題は、顔を思い出せない「上等兵」の岩石にまつわる饒舌を、衰弱しきつた真名瀬が「記憶」していることである。人間的存在としての「上等兵」その人を想起不能にもかかわらず、その「メッセージ」だけを想起する「記憶の機制」。

岩石を作るのはマグマばかりではない。宇宙から飛来する隕石もある。しかしなにより重要なのは生物の働きである。風化作用を引き起こすのはなにも水や氷だけとは限らない。生物が岩石の風化に一役買うのであるし、生物の軀そのものが今度は石に変わる。(中略)たとえばわれわれの軀にしても、骨のカルシウムはいずれ岩になって鉱物の循環に投げ入れられる。だから君が河原で拾う石ころは、どんなによそよしく疎遠にみえようと、君とは無縁でありえない。君自身を一部に含む地球の歴史の総体を君は眺めるのであり、いわば君は君の未来の姿をそこに発見するのである。(石の来歴)¹⁶

なおも「上等兵」は語り続けるのだが、真名瀬はマラリアの熱がぶりかえし、その後の「記憶」が点描的になる。いつしか、「大尉」がいなくなったこと、捕虜になって広場に座っている自分が「着ている衣服があまりにもぼろぼろなのが恥ずかしかったのを覚えている」くらいだった。

その後に、真名瀬は、遅ればせながら「記憶」辿ってみることをするのだが、思い出したのは「夜が明けて水場の川まで這い降りたらしい。弱った軀に溪までの往復は気の遠くなるような重労働であつたけれど、喉の渇きに耐えられなかったのだろう。水を掬おうとして、掌が汚れているのに気がついて洗ったのを覚えていた。汚れは固まった血であるらしく、濯いでも濯いでも水中に赤い雲が散った。直接流れに顔をつけて腹一杯水を飲み、そこで体力を使い果たして、気を失い倒れているところを広場まで担がれたらしい。」真名瀬が「記憶」を辿るのはここまでで、「己の運命の急転とともに洞穴の出来事は速やかに遠ざかった」のである。掌の固まった血は、突然「記憶」にあらわれるのだが、また急速に「抑圧」されていく。

捕虜を運搬するトラックを待つ間、真名瀬は、米兵と物々交換ができるものはないかと「上衣の胸ポケット」を探すが、「灰色の生地に微かに緑色の筋の入った小石で、掌にころがしてみた真名瀬は、こんなものでは一銭にもなりはしないと嗤いながら、かといつて捨てる気にもなれなくて、すべすべした鉱物の感触を何度

もたしかめてみた。／あの石はどうしただろうかと真名瀬はときおり考える。あれが石なるものをしげしげと眺めてみた最初の機会だった気がして、己の道楽の出発点があつた石にあるのかと思えば、懐かしいような切ないような不思議な気持ちに捉えられる。」

その一方で、「石の来歴」を真名瀬に語った「上等兵」のことはいっこうに思い浮かばない。「上等兵」その人そのものではなく、「上等兵」から聞いた話のことを真名瀬が思うのは、自分が岩石の標本をつくり、それを顕微鏡で覗くときで、「岩石とは地球の歴史の凝縮物である」との言葉が頭に甦って、つくづくそのとおりだと同感しながら、ひとり頷いてはまたレンズを覗き、鉱物のひとつひとつに「果てし無く繰り返される物質の変化と循環がこの一瞬に凍結されている」さまを見る真名瀬は、「夢幻の陶酔のなかで目まぐるしく生成崩壊する結晶の動きを追い、日頃は隠された宇宙の姿を垣間見た思いに心が慄えてくる」のだ、と。

このように、「I」において、真名瀬は、「上等兵」からの「石の来歴」の話を聞いたこと、孤絶の恐怖、動けなくなった部下の頸動脈を切り、次々と殺していく「大尉」に不思議な魅力を感じたこと、飢餓やマラリア熱の苦しさ、そしてなぜだかわからないが、喉の渇きを感じ川で腹一杯水を飲んでる時に掌に血の固まりがあり必死に洗い流そうとしたこと、捕虜となって広場で放心し、初めて「石」の魅力にふれたことだけが、真名瀬の「戦争の記憶」であつた。

戦後、真名瀬は趣味の「岩石」蒐集に夢中になるが、それ以外に関してはよくできた旦那であった、とされる。

長男の裕晶が、「岩石」に興味を示すようになり、父親の土蔵の二階に上がっては、柵の標本を珍しそうに眺めるにおよんで、真名瀬は裕晶に少しづつ「岩石」について学ばせる。小学校に上がる裕晶がますます利発さを示すにつけ、やがて真名瀬は、「将来息子科学の分野に進むことになったら素晴らしい」¹⁹などといったりの父親としての夢を抱いたりする。

真名瀬は、裕晶が十歳になると、屋外観察に伴った。もともとは、「珍しい石を集めたりいじったりする楽しさ、野山をひとり自由に闊歩する天然の悦びから出発した」ものであったが、裕晶に地質学の面白さを説くにいたっては「いつのまにか洞穴の「上等兵」と同じような話し振りになるのが情けなく、また可笑しくもあつたけれど、だが考えてみれば、上等兵の話といったところで、マリア熱の朦朧のさなか耳に入ったにすぎぬのであって、本当にあのと彼がそのように語ったのかどうかは怪しく、むしろ素人なりに地質学に熱と根氣を入れてきた、自身の経験と蓄積から生まれ出た、誰のものでもない自分の言葉だとするほうが、いまとなつては自然なのかもしれない²⁰」などとささやかな幸せのな

かに「戦争の記憶」の曖昧さから、その否認がみうけられるようになることに注意すべきだろう。

その後、裕晶が「穴」をみつけるが、それは石灰岩の試掘のあとと推察され、その「洞穴」への「好奇心」よりも、真名瀬は最愛の息子と二人きりで「未知の地境にさまよい込むスリルが嬉しくて、もちろん危険はなさそうだと判断のうえであつたけれど、冒険の魅惑に導かれるままに率先して穴にもぐり込んだ」⁵メートルも進むと板壁に阻まれ、拍子抜けするが、そこでマッチを擦って壁面を調べた真名瀬は、一部の「緑色のチャート」以外はあるべきものがなかったが、この「洞穴」と「緑のチャート」がのちに真名瀬家に、より深甚には真名瀬剛に悲劇をもたらすのだが、テクストは「先説法」を用いて次のように真名瀬の心情を叙述する。

のちにあの夏の日々を繰り返し回想した真名瀬は、やはりあれはありえぬことだつたのではあるまいかと、遠い夢追うのに似た仕方、出来事の全体を想うようになった。光いっぱいに詰まった透明な器のなかに裕晶と自分が浮かんでいる。器はすぐそこにふわふわ漂っているのに、手を伸ばせばつと遠ざかつて、思い切り掴もうとすればちゃんと弾けて消えてしまう。あれは本来の自分とは無縁の出来事、ひとときの幻影ではなかったか。(中略) 裕晶の大人びた態度、実の

父親に対してさえ言葉を選ぶような老成した風情は、どこか常軌を逸してはいなかったか。(中略) 裕晶にはすでに完成した人間の印象があった。裕晶は架空の存在、あるいはひとつの夢の結晶、自分に与えられた贈り物ではなかったか。(「石の来歴」²¹、傍線部引用者)

この先説のとおり二人で屋外観察に行った夏休みの終わり、真名瀬が家を留守にした日、裕晶は、父親といった「洞穴」で帰らぬ人となった。「死因は刺傷による出血多量、無残にも裕晶の顔面と上半身には刃物による裂傷刺傷が二十数箇所もあ²²」った。

この突然の裕晶の非業の死によって真名瀬家は、一気に家庭崩壊に陥る。もともと、真名瀬は、家庭的な人間ではなく、「石」を偏愛するだけの男だったかもしれないが、裕晶の死により真名瀬の妻は、極度のアルコール中毒に陥り、ほとんど狂気の状態となり、真名瀬を責め続けるのである。それは、真名瀬が自らを責め続けなければならない日々でもあった。「真冬の一時期を除けばほとんど陽のささぬ、暗い土蔵の住人が、ときおり母屋に顔を出し、父親や夫のふりをしていただけなのではあるまいか」²³。

だが、このテクストの吃驚さは、「I」において次男がいることがふれられていただけで、長男裕晶のようにその性格や行動が真名瀬の喜びや期待を掻きたてたようには語られておらず、むしろその存在は意図的に封印されていることだ。

もちろん、先の真名瀬による裕晶の回想が先にあり、そして、裕晶の死と妻の錯乱へ続き、そのなかではじめて貴晶の名が召喚されるのである。

この突然の次男の登場は、「語り」の混乱ではなく、むしろ裕晶とこの貴晶のテクストにおける「役割」||「機能」の問題である。父の「石」の蒐集・標本づくりに穏やかにだが、熱心に共感を示し、父からの愛情を一身に受ける裕晶と、両親にともに相手にされず、真名瀬夫婦の離婚の際には、母親に親権を放棄される一方、真名瀬と一緒に暮らすのを極端に嫌い、仕方なく真名瀬の姉夫婦にあずけられる貴晶は、裕晶とは現われにおいて対照的だが同じ「役割」||「機能」が与えられているのである。

ところで、真名瀬は、離婚前にアルコール中毒の妻を病院に連れて行くため縄で捕縛しようとするが、ウイスキー瓶で殴られて抵抗され、包丁を持ち出したその妻から人殺しと呼ばれて、土蔵に籠るが、逃げたのは「たったいま殺意に捉えられた己が恐ろし」かったからである。そして、執拗に妻の「人殺し、人殺し、と喚く声が絶えずに続いている」く。「人殺し、人殺し」と叫びながら包丁振り回す妻は、近所の人びとにより警察に通報され、やがては病院に収容され、アルコール中毒が癒えても家に戻ることはなく、次男の貴晶の親権も放棄するのだが、ここでの「送り手」たる妻が真名瀬に与えた「メッセージ」は、「あなたが裕晶を殺したのよ、あの洞窟で殺したのよ」だった。しかし、「受け手」の

真名瀬は、その「メッセージ」をまともに捉えることができない。たしかに、物語の「現実」において、息子殺しは物理的に不可能だ。とすれば、おそらく妻の「人殺し」という怒りは、真名瀬が裕晶を「石」の蒐集の趣味に引きずり込んだために、裕晶は殺されることになったのだと解釈すべきであろう。

だが、はたしてそうか。それは、アルコール中毒で狂気の淵に陥ち込んだ妻のたんなる思い込みであつたのだろうか。妻は「あなたが裕晶を殺したのよ、あの洞窟で殺したのよ」といつているのだから少なくとも妻の「送り手」としての「メッセージ」は、真名瀬が直接裕晶を殺したのだと真名瀬に突き刺さるべきものだ。だが、「受け手」の真名瀬は、自らが直接に裕晶を殺したとは思っていない。ここには「受け手」として「メッセージ」の誤読が潜んではないか。

ともあれ、夫婦は離婚し、次男の貴晶が残るが、母親から育児放棄と折檻を受けてきており、何より父親にも懐かない。そのため、貴晶は、真名瀬の姉の家に預けられることになる。

ひとりになった真名瀬は、人気がない母屋にいたのでは寂寥感がどうにもやり切れなくて、結局戻るのは土蔵の二階、しばらく石など見る気にもなれず、毎日毎日ぼんやり夢想にときを過ごしていたけれど、裕晶の遺した机に死者の幻影を眺めながら、僅かな遺品を繰り返し手に取るうちに、未完成

に終わった岩石標本を完成して墓前に供えてやろうという気になり、久しぶりにハンマーを携えて露頭を巡り、標本洗浄の薬剤を水に溶いた。

不恰好に石を収めた菓子箱は、ダンボールで仕切られた三十の区画のうち三つがまだ空白で、そこに裕晶が何を入れようと考えていたのかは見当がついていた。緑色のチャート、残り二つはどうあれ、これだけは間違いがなかった。あの日裕晶が松井田の石切場に行つたのは、洞穴の壁に緑色チャートの層があるといった、父親の言葉が頭にあつたからに相違なく、別の場所で採取したその石を綺麗にクリーニングしてから、最後に箱に収めた真名瀬は、葬式のときとは較べものにならぬ涙を零した。〔石の来歴²⁴、傍線部引用者〕

ここでは、裕晶の「不在」が「送り手」になって、真名瀬に裕晶の未完成の標本を完成させたように思える。なるほど、この「供養の標本」を作り上げてからは、真名瀬はふたたび「石」を触りはじめるようになるからだ。店で働き、町の飯屋で食事をすませたあとは、家に戻り、深夜遅くまで土蔵で作業するという「規則正しく変化のない生活が還って」くるのだ。

しかし、真名瀬はやがて「戦争の中の出来事をしきりに思い出すように」なるのだ。レイテの洞窟で「上等兵が語った言葉」を頻繁に聴くようになり、独り言もいうようになり、「この場合

相手は裕晶の幻」であった。

精神の異常、それをかりにいうならば、むしろ彼の夢こそが問題にされるべきであつただろう。真名瀬はしばしば悪夢に苦しめられるようになったのである。（「石の来歴」²⁵）

しかし、「語り」は、真名瀬の「悪夢」がどのようなものかすぐには説明しない。むしろ、テクスト内の「現実」と「悪夢」の境界が存在しないかのように語るのである。

真名瀬は、裕晶が殺害された現場である「松井田の採石場跡」にはしばらく近づくずにいたが、化石採集に夢中になつて気がつくと自転車のペダルを漕ぎ、「あれほど避けていたこの場所に知らずに足が向いたのは、一定の時間の経過ののち、痛みや嘆きの大きさは変わらず、むしろいつそう深く根を張つたのだとしても、出来事の衝迫力はやはり薄れてきていて、己が何事か決着をつけたがつてゐる証拠と思えた。ならばたしかにこれはちようどよい機会、あるいは偶然とみえて、心が密かに窺つていた機会なのかもしれなかつた」と感じるのであるが、はたしてこれは「現実」か「悪夢」なのか。というのも、真名瀬は、裕晶が惨殺された「洞穴」に「ちらちらする灯」をみつける。最初は、「死んだ裕晶が合図を寄越している」と思え、「いや、ひよつとすると息子はまだいきているのではあるまいか」という荒唐無稽な事実を信じるよう

に、恐怖を忘れ、鉄条で嚴重に固定されている板戸を道具袋からタガネとハンマーを取り出して、「針金をずたずたに断ち切り板戸を外し」、洞穴に入り込んで灯を探るのだが、その灯の正体は、裕晶の合図などではなく、「焚き火」であつた。

人がいた。枯草色の軍服に紅の線の入つた軍服、片足だけに固くゲートルを巻いた男がひとり、岩に尻をつけて座り、炎に半身をあかく照らされた男の背後では、黒い巨塊をなす影が意志ある者のように蠢いている。（中略）

火の前の男が手にしていた刀を鞘から引き抜いた。その動作を真名瀬は何故かわくわくする期待感とともに眺め、暗がりにも光る白刃が眼を射、壁に巨影が大きく傾いてこちらに向かつて殺到するのをみたとき、ここがあの場所であるとの理解が訪れ、喉元に押し寄せる絶叫に唇が歪んだ、そのとき、真名瀬！鋭く呼ぶ音が耳を撃てば、悲鳴は凍りつき、反射的に直立不動の兵隊は、はいつ、と短く返事をしていた。（「石の来歴」²⁶）

真名瀬は、「現実」と思われる世界から「夢」の世界へと、子どもを亡くした父親から命令を受ける兵隊へと行きつくのである。ならば、「送り手」と思われた裕晶は、真の「送り手」である「悪夢」への導き手でしかなかつた。いや、この場合、裕晶の幻が「援

助者」となって、真名瀬に真に「記憶」と向き合うよう手助けをしたというべきかもしれない。

「大尉」は、「石の来歴」を、その魅力を教えてくれた「上等兵」を「耳障り」だということで、執拗に真名瀬に対して自分の白刃で殺すようにせまるのである。一方、殺されようとする「上等兵」からは、「朝になるまで待つて欲しい。是非もう一度太陽をみてから死にたい」と懇願される。殺せという命令と待つて欲しいという懇願に引き裂かれる真名瀬だが、「――殺せ、真名瀬！」という「大尉」の大声に負ける。

作法もなにもあらばこそ、なおも言葉を継ぐべく黒い口をぼっかり開いた男めがけて、真名瀬は力まかせに刀を振り下ろした。岩を打ったのか、がつんと固い手応えに指が痺れ、同時に絶叫があがって、しまった、頭の端に当たってしまつたと、失敗の恐怖に逆上すれば、もう我を忘れて顔といわず目茶苦茶に刀を叩きつけた。早くとどめを刺さなければと、焦れば焦るほど破綻した神経は機械的に筋肉を収縮させるばかりで、気がついてみれば刀の柄を握る掌が真っ赤に染まっている。それでもまだ男は死なずにいて、やめてよ、やめてよ、と泣き叫ぶその声はいつのまにか子供のものになつていく。「石の来歴」²⁷ 傍線部引用者)

「現実」から「悪夢」へと架橋された通路を真名瀬は通り、「絶叫をあげて」「眼を覚ます」。抑圧していた「記憶」が「悪夢」において覚醒するのである。ここにおいて「主体」である真名瀬は、「対象」たる抑圧された「記憶」＝「無意識」、あるいはトラウマにはじめて直接ふれたともいえる。真名瀬が「探求」しなければならぬのは、この「悪夢以上の何か」なのであるのはいうまでもない。

7

「Ⅲ」では、これまで「語り」によつて封じ込められてきた真名瀬の次男貴晶が、「送り手」として登場する。

貴晶は、かつて母に折檻され続け、裕晶の死後の家族崩壊の後、も決して父親である真名瀬には懐かなかつたため、真名瀬の姉である伯母のもとで育てられるが、「語り」は、この貴晶の成長の過程の叙述の速度を速め、「錯時法」はほとんど使わずに「物語内容の時間」として進めていく。サッカーが得意であることが語られるが、「小学校にあがる前から日曜も祭日もなく毎夕遅くまでボールを追いかけて廻し、中学になると」といった具合に「要約法」を用いて、前へ前へと前進していく。あたかも破局を^{カタルシス}目指すかのよう。

いったん「休止」がおかれるのは、貴晶が高二の秋のサッカー

の予選大会においてである。その緒戦において貴晶は背後からタックルを受け、左足のくるぶしを骨折するのだが、興奮した貴晶は相手を突き倒し、しまいには、駆け寄り注意を与えた審判までも「拳で殴りつけた」ため即刻退場になる。まさにその試合の場面を真名瀬が観ていたのである。

視点は真名瀬に移り、「語り」の速度は緩やかとなり、「物語内容の時間」が「物語言説の時間」へと変化する。真名瀬は、貴晶が自分へのわだかまりを解いてくれるのではないかと淡い期待をもっていたが、貴晶の「暴力」をみるにおよび、次のような感慨に襲われるのである。

真名瀬は悪寒がきて顫えがとまらず、付き添おうとするベンチの者を邪険に振り払い、傷ついた左足を引きずって独りグラウンドを去っていく選手の後ろ姿みたときには、彼が父親を依然容赦していない事実を確信した。背番号「2」の背中には孤独な憎悪がわだかまり、憎悪の矢は他でもない、観客席の片隅の父親ひとりに向けられていた。わざわざ自分に見せつけるために暴力が振るわれたのだとさえ感じられ、何がそれほど貴晶を傷つけたのかと、軀を小刻みに顫わせ続ける真名瀬はあらためて疑い、思えばそんな風に息子の内面にあるこれ想像を巡らせたのはじめてではないかと思われて、死んで何年にもなる長男については愚図愚図と追想を繰り返

しているくせに、もうひとりの子供などはいないかの顔で暮らしてきた己に呆れ、結局あの頃もいまも貴晶に対しては終始一貫無関心だったのだと、悄然たる自覚に打ちのめされた。
 (「石の来歴」²⁶)

たしかに、真名瀬自身が自覚するように貴晶は、裕晶が生きている間は「語り」によって封じ込められていた。それは、先述したように二人の「役割」＝「機能」が同じでも現われ方が違うからだろう。裕晶は、あたかも真名瀬の「戦争の記憶」を封印するような、戦後の充足した生活の証であつたように思えるが、生きているうちは「上等兵」のことを想起させるために、死してもなお「上等兵」のことを思いださせようとする「援助者」であつたのだが、真名瀬は、むしろその「敵対者」となつた。決して真名瀬は、「上等兵」の人となり、姿など、つまりは人間存在として想起することはなかったではないか。

他方、「兄と違いどちらかといえば父親²⁷の貴晶」(傍点部引用者)は「暴力」をまもっているが、彼もまた裕晶とは違った「援助者」であり、「送り手」であつたのだ。

「物語内容の時間」に戻った貴晶は、一直線に破局に向かつていく。サッカー部を辞め、勉強強して、とある私立大学に入学する。最初は、チーム名「赤い悪魔たち」という同好会をつくり、遊びごとのサッカーに興じていたが、夏の合宿で内部分裂をした

「赤い悪魔たち」は、秋のキャンパスに戻った時、もはやボールを追いかけて廻す機会は巡ってこなかった。「一九六八年、列島に吹き荒れた学生叛乱の風が、最後のエネルギーを解放すべく、加速をつけて力と熱を膨れ上がらせていた時期」であり、「闘争の炎はいまや燎原の火となつて全学を巻き込んで燃え広が」つており、貴晶もまたこの「学生叛乱」に参加し、「いまや最も激越な行動を主張する者のひとり」となつたのである。当初は、貴晶は「赤い悪魔たち」時代の仲間たちとだけ行動をともし、あまたの左翼政党派とは距離を置き続けていたけれど、七十年の峠を過ぎ、学園闘争の炎がそろそろ下火になる頃になつて、数人の仲間とともに革命党派のひとつに加わつた。」

このように貴晶はたつた数頁の間に破局に向かつて駆け抜けていく。「関東近県の鉄砲店を襲撃する計画を立案し」、まわりの反対を押し切つて「手近なところにいる人間のみ同意を取り付けて、貴晶らは銃砲店を襲」い、店主の予想外の抵抗に遭つて「貴晶は、緊縛用に準備した針金で老人の頸を締めて殺し」てしまうのであつた。貴晶が行き着いた、このひとつの破局^{カタルシス}。次の作戦に移るときにさらに「三人の人間が死んだ」が、それは脱落者の存在で、貴晶もかつて「赤い悪魔たち」の結成に奔走した仲間を始末していくが、その彼は自らの部屋で首をくくつて既に死んでいた。「そう気づいたとたん猛烈な悪臭に鼻を撃たれ、アパートを飛び出た貴晶は夜の街路を全力で駆けた。」

一方、真名瀬は、「姉の家に預けた時点で自分は子供を捨てたのである」と諦めており、貴晶が学生運動に係っていると聞いても「画然たるイメージが湧か」ず、「いずれにしても自分にとやかくいう資格も権利もないのだから」と思いを定め、万が一貴晶が人様に迷惑をかけてしまったなら、全財産を処分してでも後始末だけは引受けようと覚悟を決めた」のだが、いざ貴晶が真名瀬の土蔵の二階に予告なく現れると、「真名瀬は不意をつかれた狼狽のあまり、何しにきたんだと、斬りつけるような挨拶がいきなり出てしま」うのだ。しかし、「真名瀬は、血の匂いをはつきり鼻に嗅いだ気がして、すると何故だか目玉に蛆の湧いた男の顔が眼前に浮かんて、こいつは人を殺したに違いないとの直観が閃き、そう思つたときにはもうすでに、人を殺したな、と口から言葉が滑り出していた。」相も変わらず、真名瀬の内面と発話は、「語り」によって制御されているが、しばらくして貴晶が、

——あんただつて戦争では人を殺しただろう？

という貴晶の発話から、このテクストの「物語」で唯一の「会話」がおこなわれていく。真名瀬の発話もすべてではないがここではじめて分節化される。ただこの「語り」の視点は真名瀬にあるので、彼の内面は地の文において示され、長い発話もまた地の文に埋め込まれている。

「会話」は、真名瀬が息子の死の覚悟を知った後、話題はおおよそ「石」をめぐるものとなる。発端は「緑色のチャート」だったが、真名瀬は貴晶に「石の来歴」についての長く論じるのだが、貴晶は、「――あなたが何十年かけて知ったことはそれだけか。何だか知らないが、俺はもつとすごいことをしていたのかと思っただよ」と真名瀬の戦後を全否定にかかる。だが、貴晶が真名瀬を訪ねた真意は、そこにはなかった。

――あなたはあの場所に行つてみた？

「語り」は、貴晶の話をきく真名瀬の内面からやがて、カメラ・アイに変わっていく。たとえば、

ハンマーの槌音は驚くほど響く。洞穴内でハンマーを振るうのは落盤の危険がある。が、知識の足りない子供にそこまで注意を求めるのは無理だ。採取した掌のなかの標本を兄弟にみせている。緑色チャートだとおしえている。（中略）父親から聞いた言葉どおりに兄は説明すると、ここはよい化石があるはずだから探検してみようと提案して、兄弟は洞穴を奥にそろそろと進み、まもなく朽ちかけた板壁に突きあたると、二人は懐中電灯を板の隙間に押し当て、黙つてなかを覗き込んでいく。

――そうしたら人の声が聞こえた。正確には俺は聞いたように思っただけだったんだが、兄貴はたしかに声がするといった。誰かが奥にいると兄貴はいった。

朽ちかけた板壁には子供が通り抜けるほどの穴は容易に開く。怖い怪獣かもしれないよ。弟はとめようとするが、絶対に人間の声だと主張する兄は、みてくるといつて隙間から洞窟の奥に滑り込んで消える。残された弟は板壁にしがみついて奥の闇を凝らして見つめていたが、（中略）暗がりに置き去りにされた恐怖に耐えきれなくなつて、兄を繰り返し呼びはじめ、その声はしだいに泣き声から絶叫に変わつて洞窟に反響する。（「石の来歴」、傍線部引用者）

傍線部は、まだ「価値判断」が残っているが、それ以後の「語り」は、カメラ・アイへと変化している。そして、いったん「物語言説の時間」が真名瀬の土蔵に戻ってきたと思う間もなく、ふたたびカメラ・アイに戻っていく。

結局、貴晶が語つた不思議な体験、兄を追いかけて「穴」にもぐつてみたものの、気がつくとき貴晶は、「穴の外」にいたという。何が何だか分からず、恐ろしくてひとり家に逃げ帰つたが、はつきり覚えていることは、「手に血がついていた」ことであつた。いくつかの「会話」がかわされ、しばらくしたのち、貴晶は驚くべき「メッセージ」を残していく。それはこうだ。

——洞窟の奥から声が聞こえたとき、兄貴はそれがあんたの声だといったんだな。おとうさんの声がすると兄貴はいった。あんたまさか、あのとき、あそこにいたなんてことはないよな? (『石の来歴』³⁰)

この「メーセージ」を残して、突然貴晶は「物語内容の時間」に戻っていき、「要約法」によって、真冬の旭川に出没し、警官の銃を奪おうとして失敗し、射殺されるのである。

裕晶、貴晶は同じ「役割」＝「機能」を別の現われで担っていたが、いずれも真名瀬に、抑圧した「記憶」、トラウマを想起させる「送り手」であり、「援助者」であったのだ。真名瀬が、抑圧された「記憶」、トラウマを想起しないがために、裕晶と貴晶は「記憶の戦争」において死なねばならなかったといえる。そのことによりよく気がついた真名瀬は、「決意を固めていた。……妻を狂わせ二人の子供を死なせたのはほかならぬこの私である」³¹と。身辺整理をすすめ、決断を実行に移す日まで三日間不眠不休で仕事をし、それに満足をして椅子に座ったまま真名瀬は眼を閉じる。「久しぶりに悪夢でない夢をみ、……やがて深い眠りの充足感を得て眼を覚ました」³²。その決意の実行とは、表面的には、「緑色のチャート」を貴晶が持つてしまったため「再度欠落が生じた標本セットの完成、最後に収められるべき緑色のチャート

を、あの「洞窟」から採集してくることに他ならなかった」(傍線部引用者)が、本当のところの目的は、裕晶が惨殺された「洞穴」で、「記憶の戦争」を闘うことにほかならないのだ。(この項につづく)

- 1 ロラン・バルト『テクストの快楽』(沢崎浩平訳、みすず書房、一九七七年4月) 参照。
- 2 テリー・イーグルトン『文学とは何か上・下』(大橋洋一訳、岩波文庫、二〇一四年) 参照。
- 3 奥泉光『石の来歴 浪漫的な行軍の記録』、講談社文芸文庫、二〇〇九年六月。
- 4 「来歴の来歴」、『石の来歴 浪漫的な行軍の記録』所収、講談社文芸文庫、二〇〇九年六月。
- 5 ジェラルド・ジュネット『物語のディスクリール—方法論の試み』、花輪光、和泉涼一訳、水声社、一九八五年九月。
- 6 大江健三郎『芥川賞選評』、『文藝春秋』、文藝春秋社、一九九四年、三六八頁。
- 7 ロラン・バルト『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、一九七九年。
- 8 A・J・グレマス『構造意味論』(田島宏、鳥居正文訳、紀

- 伊国屋書店、一九八八年）参照。
- 9 ラマー・セルデン『現代文学理論』（栗原裕訳、大修館書店、一九八九年七月）参照。
- 10 奥泉光『石の来歴』、文藝春秋社、一九九四年、七〇八頁。
発話が、分節化されるのは、「Ⅱ」に入ってからで、真名瀬の妻、フィリピン人のレイテ島の「洞穴」とおぼしきところにいる「大尉」と、「Ⅲ」において次男貴晶との「会話」においてはじめて真名瀬の発話が「分節化」される。
- 12 奥泉光、前掲書、九頁。
- 13 「男」は、齡上の古参兵であるが階級は「上等兵」であり、真名瀬は、のちに明らかにされるが「二等兵」であった。
- 14 前掲書、一〇頁。
- 15 前掲書、一六〇二頁。
- 16 前掲書、三〇頁。
- 17 前掲書、二九〇三二頁。
- 18 前掲書、三三〇三六頁。
- 19 前掲書、三八頁。
- 20 前掲書、四〇頁。
- 21 前掲書、四六頁。
- 22 前掲書、四八頁。
- 23 前掲書、五三頁。
- 24 前掲書、五八〇五九頁。

- 25 前掲書、六〇頁。
- 26 前掲書、六三頁。
- 27 前掲書、六六頁。
- 28 前掲書、七一頁。
- 29 前掲書、八九〇九〇頁。
- 30 前掲書、九三
- 31 前掲書、九四頁。
- 32 前掲書、九六頁。

（すがもとやすゆき／本学教授）

第九十六号 目次

二〇一十七年十一月

近世の『源氏物語』巻名和歌 — 冷泉為村を中心に —

山本 綏子

キリシタン語学書におけるポルトガル語接統詞の職能について

漆崎 正太

偶然確定条件から見た二葉亭四迷の文章

揚妻 祐樹

一冊 五〇〇円